

《 杉並区「特定の課題に対する調査、意識、実態調査」の結果 》

今年度も5月に3～6年生を対象に杉並区「特定の課題に対する調査、意識・実態調査」を行いました。杉並区では、全ての児童に対し、義務教育期間の終了までに、人生の基盤となる学力について、基礎での学び残しや、つまづきを解消し、活用する力のより一層の育成を目指しています。この調査は、その目標達成に向けて、本区や本校特有の課題がどこにあるのかを明らかにし、学習指導の改善充実に向けて役立てていきます。

今年度、国語、算数は3～6年生、理科は4～6年生を対象に実施しました。この調査の学校全体の結果について報告いたします。

下の図は、各教科観点別のレーダーチャートと、正答率分布状況です。平均正答率を見ると、本校は、杉並区の平均とほとんど重なっていることがわかります。教科全体でいうと、国語科では、杉並区全体が60.4%に対し、本校は59.6%、算数科では、杉並区全体が64.6%であり、本校では、63.0%、理科では、杉並区全体が65.0%で、本校は66.3%という結果でした。正答分布状況を見ても杉並区全体と本校では同じような分布状況となっていることがわかります。(裏面に続く)

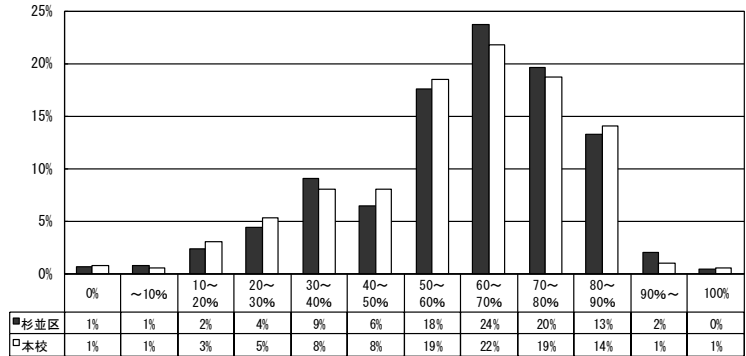
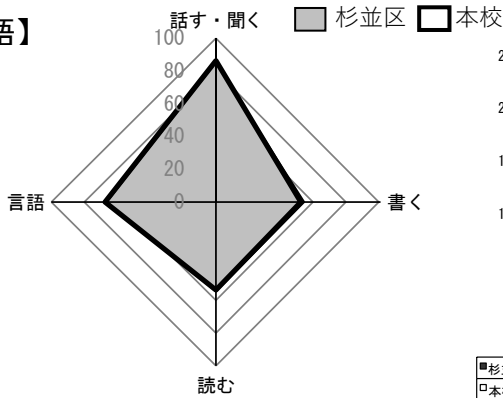
図1:学カプロフィール

【各教科観点別の正答率レーダーチャートにしたもの】

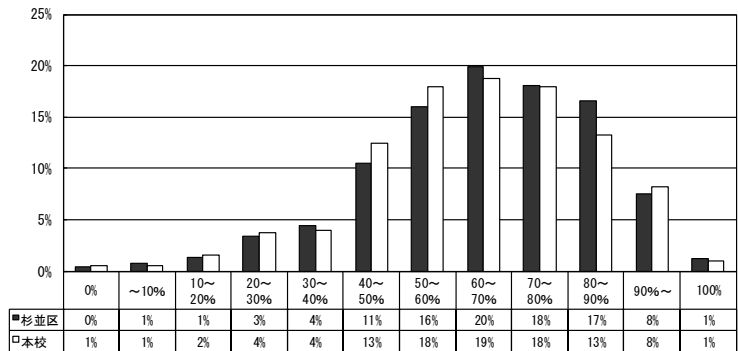
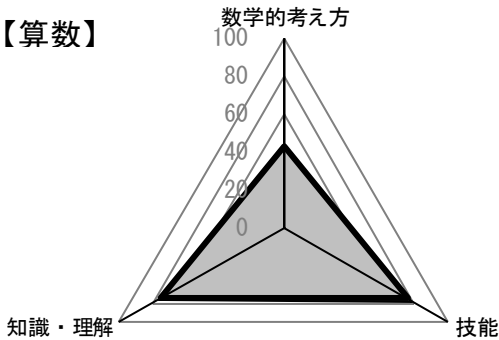
図2:正答率分布状況

【教科全体の正答率の分布状況(%)をグラフにしたもの】

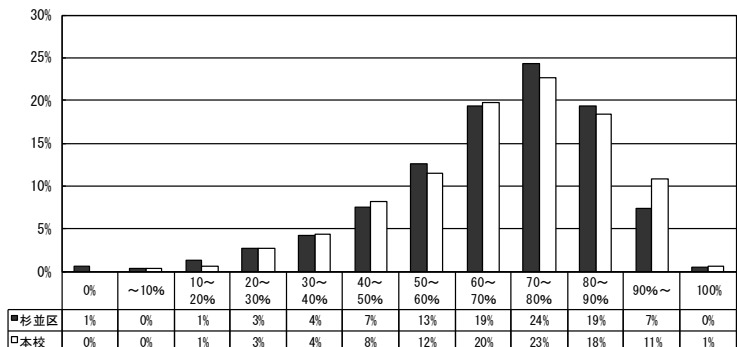
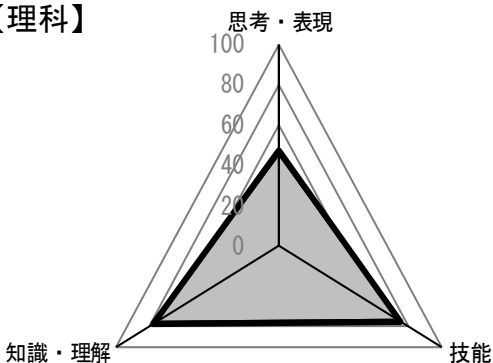
【国語】



【算数】



【理科】

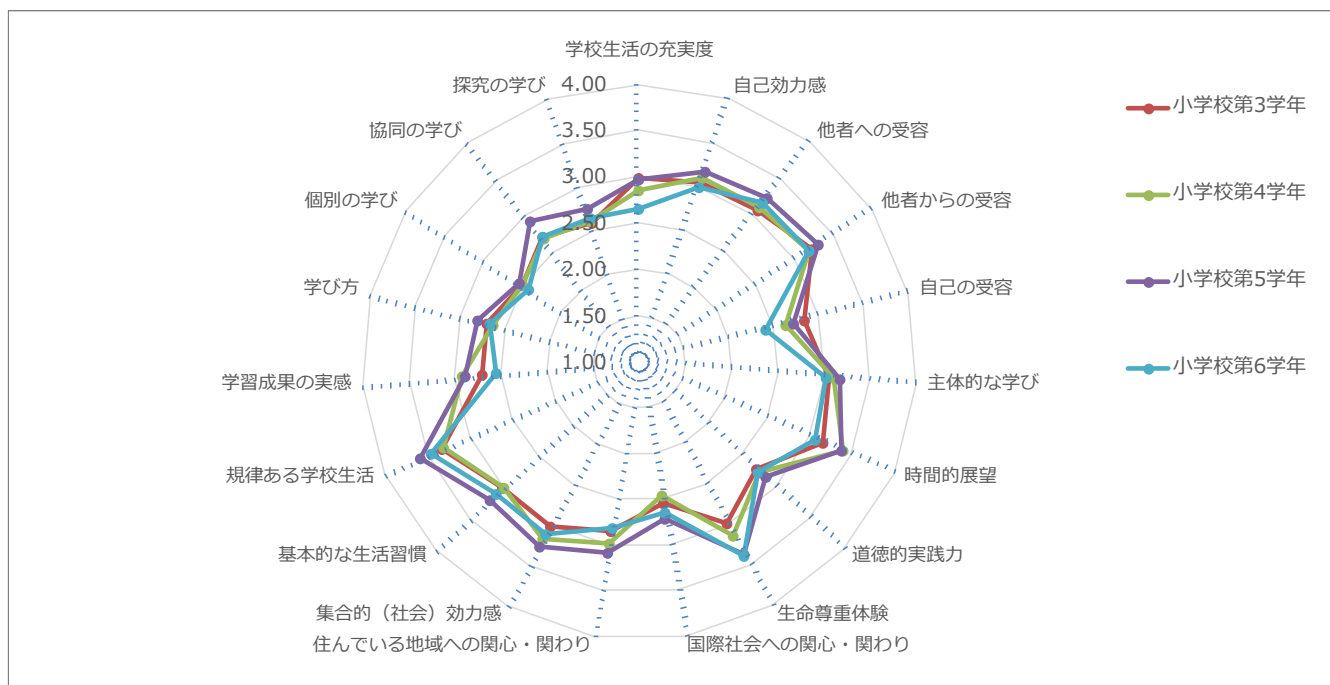


さらに、観点別で見ると、国語科では、「話す、聞く」の正答率は、86.3%と区全体の正答率を上回っているのに反して、「書く」の正答率は、52.3%と区全体よりも下回っています。また、算数科では、「数学的思考方」「技能」「知識・理解」の正答率は、区全体の平均とほぼ同じ結果がでましたが、「技能」の部分ではやや下回っていることがわかります。そして、理科においては、全ての項目で区の平均を上回っています。これらの結果から、

- ① 4年間、算数科の研究を通して培ってきた、課題をもって問題を解決していく力や、ペア学習などの対話的活動の中で、自分の考えを広げたり深めたりする力、振り返りをする事で自分の学びを確かめる力をさらに伸ばすために、引き続き様々な授業の中で取り組んでいくこと。
- ② 自分の考えを分かりやすく伝えるための書き方を段階的に指導したり、技能の定着を図るために繰り返し問題を解く機会を増やしたりすること。
- ③ 授業の中で、課題解決のために観察や実験などの体験的な活動を多く設け、学習したことが、自分自身の確かな学びにつながるようにすること。

に重点をおいて授業に取り組んでいきたいと思えます。

次に、意識・実態調査の結果について報告いたします。下の図は、意識・実態調査の各領域に含まれる項目の平均（肯定＝4、やや肯定＝3、やや否定＝2、否定＝1）のグラフです。



各領域や各学年で、ばらつきが見られるのがわかります。肯定率が高い（3.00以上）ものとしては、規律ある学校生活、主体的な学び、他者への受容と他者からの受容などの領域があげられます。学校のルールを意識しながら学校生活を送れていること、興味・関心をもって学習に取り組むことができていること、お互いのことを認め合い行動することができると感じている児童が多いことがわかりました。

逆に、肯定率が低い（3.00以下）ものとしては、自己の受容、探究や個別の学び、学習成果の実感、道徳的実践力などの領域があげられます。大人がもっと、様々な場面で児童を認めたり、声をかけたり、励ましたりして自己肯定感をもてるようなかわりをもつことや、児童が学習の中で、分からないことや疑問、さらに調べてみたいと思ったときに、質問できたり、解決するための時間を十分確保したりすること、自分が「分かった。できた。」と、実感できるような場を多く設けることが大切であることを改めて感じました。また、道徳的実践力については、今年度から道徳科の研究をスタートする中で、これから伸ばしていけるよう授業のより一層の工夫が必要であると感じています。

これらの結果をもとに、各学年の課題だけでなく、個々の課題についても捉え、一人一人に合った指導に生かしていきたいと思えます。3年生以上の児童には、個票を後日配布する予定です。返却された際には、お子さんと共に御覧になり、今後の御家庭での学習や日々の生活の過ごし方などに生かしていただきたいです。